

歸去來兮辭并序 東晉・陶潛

余家貧、耕植不足以自給。幼稚盈室，瓶無儲粟，生生所資，未見其術。親故多勸余為長吏，脫然有懷，求之靡途。會有四方之事，諸侯以惠愛為德，家叔以余貧苦，遂見用為小邑。于時風波未靜，心憚遠役，彭澤去家百里，公田之利，足以為酒，故便求之。及少日，眷然有歸歎之情。何則質性自然，非矯勵所得。飢凍雖切，違己交病。嘗從人事，皆口腹自役。於是悵然慷慨，深愧平生之志。猶望一稔，當斂裳宵逝。尋程氏妹喪於武昌，情在駿奔，自免去職。仲秋至冬，在官八十餘日。因事順心，命篇曰歸去來兮。乙巳歲十一月也。

歸去來の辭 并びに序

余、家貧しくして、耕し植うるを以って自給するに足らず。幼稚室に盈ち、瓶に儲粟なし。生生、資とすべき所、未だ其の術を見ず。親故、多く余に長吏と為るを勸む。脱然として懐い有るも、之を求むるに途靡し。会たま四方の事有りて、諸侯、惠愛を以って徳と為す。家叔、余の貧苦以って、遂に小邑に用いらる。時に于て風波未だ静まらず、心に遠き役を憚る。彭沢は家を去ること百里、公田の利は、以って酒を為るに足れり。故に便ち之を求む。少日に及び、眷然として帰らん歎の情あり。何となれば則ち質性の自然は、矯勵するも得る所に非ず。飢えと凍えは切なりと雖も、己れに違わば交、ごも病む。嘗て人事に従いしは、皆口腹の自から役せしなり。是に於て悵然として慷慨し、深く平生の志に愧ず。猶お一稔して、当に裳を斂めて宵に逝くべしと望みしも、尋いで程氏の妹、武昌に喪る。情は駿奔に在り、自から免じて職を去る。仲秋より冬に至るまで、官に在ること八十余日。事に因りて心に順う。篇に命づけて「歸去來辭」と曰う。乙巳の歳十一月なり。

乙巳歳：義熙元年(四〇五) 陶淵明四十一、二歳の頃の作

一海知義著作集 「陶淵明を読む」より抄出

- 1 歸去來兮
かえんなんいぎ
帰去来兮
- 2 田園將蕪胡不歸
たまさはれんとするに胡んぞ帰らざる
- 3 既自以心爲形役
既に自ずから心を以って形の役と爲しつ
- 4 奚惆悵而獨悲
なにおもむす
奚ゆえに惘い悵ぼれつつ独り悲しむや
- 5 悟已往之不諫
すでに
已に往きしときの諫むべからざるを悟り
- 6 知來者之可追
来る者の追う可きを知る
- 7 實迷途其未遠
まことに途に迷うこと其れ未まだ遠きにあらず
- 8 覺今是而昨非
今は是しくして昨は非なりしを覺る
- 9 舟遙遙以輕颺
舟は遙遙として軽やかに颺り
- 10 風飄飄而吹衣
風は飄飄として衣を吹く
- 11 問征夫以前路
征夫に問うに前なる路を以ってし
- 12 恨晨光之熹微
あした
晨の光りの熹微なるを恨む
- 13 乃瞻衡宇 載欣載奔
すなわ かぶき むね み すなわ よろ
乃ち衡の宇を瞻 載ち欣び載ち奔る
- 14 僮僕歡迎 稚子候門
どうぼく ようこ おさな
僮僕は歡迎え 稚き子は門に候つ
- 15 三逕就荒 松菊猶存
三すじの逕は荒るるに就きも 松と菊は猶お存きたり
- 16 攜幼入室 有酒盈樽
幼きものを携れて室に入れば 酒有りて樽に盈てり
- 17 引壺觴以自酌
とくり さかずき
壺と觴とを引きよせて以って自ずから酌み
- 18 眴庭柯以怡顏
えだ なが
庭の柯を眴めて以って顔を怡ぼす
- 19 倚南窓以寄傲
南の窓に倚りそいて以って傲みを寄すれば
- 20 審容膝之易安
げ
審にも膝を容るるのみなるところは安らかなり易し
- 21 園日涉以成趣
園は日びに涉いて趣を成し
- 22 門雖設而常關
門は設けたりと雖も常に関せり
- 23 策扶老以流憩
ふるろう つえ いこ
扶老を策として以って憩いを流くし
- 24 時矯首而遐觀
時に首を矯げて遐に観る
- 25 雲無心以出岫
雲は心無くして以って岫を出で
- 26 鳥倦飛而知還
鳥は飛ぶに倦きて還るを知る
- 27 景翳翳以將入
ひかげ おくら
景は翳く翳く以て將に入まんとし

- 28 撫孤松而盤桓
ひとりおいし松を撫でつつ盤桓す
 孤ひとりりおいし松ぼんかんを撫なでつつ盤桓ばんかんす
- 29 歸去來兮
かえんなんいせ
 歸かえん去なん來い兮せ
- 30 請息交以絕游
ねがはくはまじわをやすめて
 請ねがわくは交まじわを息やすめて以もつて遊まじわりを絶たまたん
- 31 世與我而相違
たがはそむ
 世たがと我そむとは相たがいに違そむけるに
- 32 復駕言兮焉求
またくるま
 復またた駕くるまにのりて言われは焉なにをか求もとめんとはする
- 33 悅親戚之情話
まじわ
 親まじわ戚ことばの情まじわある話ことばを悦よろこび
- 34 樂琴書以消憂
ふみ
 琴ふみと書ふみとを樂よろこしみつつ憂うれいを消くす
- 35 農人告餘以春及
われ
 農われ人われ余われに告つぐるに春ちかづの及ちかづきしことを以もつてし
- 36 將有事於西疇
た
 將たに西にしの疇しほにて事しほ有あるといふ
- 37 或巾柴車 或棹孤舟
あらき
 或あらきは柴あらきの車ぬぐを中ぬぐい 或あらきは孤さか舟さかに棹さかさしつ
- 38 既窈窕以尋壑
お
 既おに窈ぶか窕たにも壑そに尋もとめ
- 39 亦崎嶇而經丘
たか
 亦たか崎ひく嶇ひくも丘ひくを經ゆく
- 40 木欣欣以向榮
たの
 木たのは欣たのしくも欣たのしげに榮はなさくに向ちかつ
- 41 泉涓涓而始流
すず
 泉すずは涓すずしく涓すずしくも始はめて流ながる
- 42 善萬物之得時
よ
 萬よ物の時よを得よたるを善よしとし
- 43 感吾生之行休
や
 吾やが生やの行やくゆく休やすまんことに感あず
- 44 已矣乎 寓形宇內復幾時
や
 已やんぬる乎かな 形かなを宇よ内に寓よすること復またた幾ま時まぞや
- 45 曷不委心任去留
な
 曷なんぞ心ゆたを委ゆたねて去ゆたり留ままるに任まかせざるや
- 46 胡爲乎遑遑兮欲何之
なにせ
 胡なにせ為あんとて遑あわたしくも遑あわたしく何いずくにか之ゆかんと欲ほする
- 47 富貴非吾願
わ
 富わ貴わは吾わが願わいに非なず
- 48 帝鄉不可期
みかど
 帝みかどの郷くには期くにす可かからず
- 49 懷良辰以孤往
とき
 良ときき辰なつかを懷なつかしみては以もつて孤ひとりり往いき
- 50 或植杖而耘耔
た
 或たいは杖たを植くてて耘つちかり耔つちかわん
- 51 登東臯以舒嘯
おか
 東おかの臯おかに登ありて以もつて舒ゆるやかに嘯うそむき
- 52 臨清流而賦詩
ま
 清まき流まれを臨まにしつつ詩つを賦つらん
- 53 聊乘化以歸盡
い
 聊いか化いに乗いじて以もつて尽つくるに歸かし
- 54 樂夫天命復奚疑
か
 夫かの天な命なを樂なしみつつ復またた奚なにをか疑なわん